Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-14

喜びの表情に及ぼす社会的文脈の影響

瀧上, 凱令

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要,22/23:81*-86*

(Issue Date)
2004-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001282

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001282

喜びの表情に及ぼす社会的文脈の影響

瀧 上 凱 令

目 的

表情の研究はダーウィンに始まるとされるが，ダーウィンの研究においても，それ以後のほとんどの研究においても，表情は感情（情動）の生起に伴う生理的な変化の表れであるとする見方が前提とされていた思われる。Ekman(1971)のFacial Affect Programはそれを明確に打ち出したものである。表情を，強める，弱める，抑制して表れないようにする，異なった表情で隠すなどの変形はあるにしても，感情と表情は本来は対応するものと考えられてきた。しかし，近年，表情は必ずしも感情の表出ではなく，社会的相互作用のためのツールあるいは対人的なディスプレイであることを主張する研究が見られるようになってきた。たとえば，Fernandez-Dolsら（1995）はバルセロナオリンピックのゴールドメダリストの表情を，表彰台の前で表彰式を待っているとき，表彰台に上り役員や観客との相互作用があるとき，国旗の掲揚に注目しているときを比較し，スマイルは観客との相互作用のあるときにもっとも強く表れることを示した。しかし，この研究は喜びの感情はスマイルとして表出されるということを否定するものではない。一方Krautら（1979）はボーリング場での観察を通じて，ストライクやスペアーがとれただけではスマイルは表れず，振り向いて他人との相互作用があるときにスマイルが表れることを明らかにし，喜びの感情が必ずしもスマイルと直結しているわけではないことを示した。

本研究ではサッカーでゴールを決めた選手の表情を分析し，喜びの感情は必ずしもスマイルとして表出されるものではないこと，スマイルは社会的相互作用の中で感情を伝えるため，あるいは感情を共有するために表出されることを明らかにすることを目的とする。

なお，ここではスマイルという言葉を用いているが，他に適当な言葉が見つからないための便宜的なものである。たとえば，笑顔という表現では強い喜びの表情を示すのに適当ではない。ほほえみという表現にも同じことが言える。笑いではおかしいという感情に伴うものを除外できない。したがって，便宜的にスマイルという言葉を用いるが，笑顔やほほえみや笑いに共通する顔の筋肉運動を指すものとする。

方　法

分析のための表情サンプルとして，2002年に韓国と日本で共同開催されたワールドカップサッカーのオフィシャルDVD「2002 FIFA WORLD CUP KORIA JAPAN　ALL 161 GOALS」（発売：GAGA Communications, Inc / CRIATIVE AXA / AMUSE PICTURES / SONY PCL，販売：アミューズメントソフト販売株式会社）を用いた。収録された163ゴールのうち，2ゴールはPK戦のウイニングゴール，3ゴールはオウンゴールであったので，これを除いた158ゴールを分析の対象とした。このDVDにはゴール前の状況，ゴールの瞬間およびゴール後の喜びのディスプレイが収録されている。ゴール後の映像はゴールを決めた選手，チームメイト，監督やコーチ，観客などの喜びの映像が中心であるが，一部に相手チームの落胆の映像が含まれている。ゴール後の映像は長短さまざまであるが，長いものでも8秒（240フレーム）程度であった。また，メインの映像のほかにゴールの直前・直後の別のアングルからの映像も収録されており，この映像で表情が確認できるものもあった。

映像は1秒間に30フレームで，表情が確認できる最初のフレームは何フレーム目か，最初のフレームでスマイルが見られたか，スマイルが見られない場合は何フレーム目にスマイルが表れたか，どのような状況で表れたかを記録した。ゴールの瞬間をどの時点にするかについては，ボールがゴールラインを越えた時，あるいは審判の笛の音などが考えられるが，いずれも判定が難しいので，ボールがゴールのネットに触れた瞬間とした。この場合も判定は

難しく，±5フレーム程度の誤差を含んでいるものと思われる。

分析はパソコン(SONY VAIO PCG-R505Q/BD)を用い，「Inter Video WinDVD 4」のスロー再生とコマ送り再生によって行った。さらにDVDプレイヤーでの再生によって表情のチェックを行った。

結　果

1．　全体について

ゴールを決めた本人の表情に一瞬でもスマイルが表れたものを「スマイルあり」とした。「不明」は，横向きや後ろ向きの映像で表情が確認できないもの，チームメイトが密集し人垣の中にまぎれて表情が確認できないものなどである。なお，最初に表情を確認できるフレームが必ずしもゴール直後をあらわすわけではない。表情を確認できない映像が続き，表情を最初に確認できたのが195フレーム目というケースもあった。映像はゴール直前・直後の両チームの選手たちの動きを全体としてとらえ，その後ゴールを決めた選手をアップでとらえるという構成になっており，表情を確認できる最初の映像が30フレーム目(1秒後）から60フレーム目（2秒後）に収まるものもかなりあった。「どこにもスマイルなし」に分類したものも，分析したＤＶＤの映像に限ったものであり，スマイルが全く出なかったということを示すものではない。

以上の結果，表情が確認できた最初のフレームにスマイルが見られたのが64例（40%），最初のフレームにスマイルが見られなかったのが78例（49%），最初のフレームにはスマイルがなかったが，後のフレームでスマイルが見られたものが38例（24%），映像のどこにもスマイルが見られなかったのが40例（25%），表情を確認できる映像がなかったものが16例（10%）であった(表1)。この結果は瀧上(2004)の結果と一部に違いがあるが，これはデータを再分析し，曖昧なものであっても一瞬でもスマイルが表れたと思われるものは「あり」と判定し直したためである。

表1　ゴールを決めた選手の表情

最初のフレームにスマイルあり	64
最初のフレームにスマイルなし→後にあり	38
どこにもスマイルなし	40
不　明	16

2．スマイルの表れた状況

スマイルの多くは，チームメイトが駆け寄ったとき，チームメイトと目が合った時などに表れた。当初スマイルが無く，後にスマイルが見られた38例の内には，チームメイトに対した時にスマイルが表れたことがはっきり読み取れるものが多かった。また，観客席に対してスマイルを向ける例はほとんど見られなかった。

3．直後の表情と喜びのディスプレイ

ゴールを決めた直後にスマイルが表れたのは半数程度で，残りはむしろ怒りに近い表情の方が多かった。また，顔の表情よりも，片手を突き上げて走る，両手を広げて走り回る，シャツを脱いで振り回す，宙返りをする，大声を上げるなど全身を使った大きく激しいディスプレイが多く見られた。一方，表情がまったく変わらず，派手なアクションも無く，淡々とボールを拾っただけというケースが2例あった。

4．個人差について

ゴールを決めてからチームメイトに対面する以前にスマイルが表れる選手もある。たとえば，ブラジルのロナウド，トルコのイルハン・マンシズ，日本の稲本潤一などである。また，ブラジルの選手は顔に表情がよく表れるが，ドイツやデンマークの選手はあまり表れないなど，国による違いも見られた。

考　察

感情（情動）が生じれば表情が伴なうことは自明のように思われてきた。

しかしながら，本研究の結果から，喜びの感情は必ずしもスマイルとして表出されず，社会的文脈が重要な意味を持つことが明らかにされた。すなわち，スマイルが表出される場面の分析から，スマイルは対人相互作用の中で喜びの感情を伝えるため，あるいは喜びの感情を共有するために表出されると解釈した方が良いと思われる結果が得られた。したがって，対人相互作用のない場面では，喜びの感情が生じても必ずしもスマイルとして表出されるわけではないということが言える。

一方，われわれは対人相互作用のない場面でのスマイル，いわゆる「一人笑い」というものがあることを知っている。しかしながら，一人笑いも社会的なものであるとする研究が行われている。Fridlund (1991)は楽しさを喚起するビデオを，1）被験者一人で見る，2）友人が別室で別の作業をしており，ビデオは一人で見る，3）友人が別室で同じビデオを見ている，4）被験者は友人と同室でビデオを見るという条件で見せ，大頬骨筋のＥＭＧを測定した。その結果，3）と4）の間に違いがないことから，一人笑いは想像上の対人相互作用を反映したものであると主張している。この結果は本論文で論じてきた喜びの感情に伴なう表情ではなく，楽しいという感情に伴なう表情ではあるが，両者は共通性が高いと考えても良いのではないかと思われる。

これまでの表情研究では，さまざまな感情がまとめて論じられてきた。しかしながら，驚きのように表情の表出に社会的文脈が不要で感情に伴なう生理的変化によって表情が解釈できるもの，悲しみのように一人の場面でも社会的相互作用がある場面でも表出されるもの，喜びのように社会的相互作用がない場面では表出されないものといったように，それぞれの特長によって分けて検討する必要があるのではないかと思われる。

（付記：選手の表情の判定について，何人かの被験者に映像を提示して評価実験を行った方が客観性の確保のために望ましいが，著作権に触れるため行わなかった。したがって，表情の判定は著者一人で行ったため，データの信

頼性に若干の問題があるかも知れない。他の判定者が判定すれば細部の変化は生じる可能性がある。しかしながら，データの大枠については変動はないと言い切れる程度に明瞭なものであった。)

引用文献

Ekman, P. 1971 Universals and cultural differences in facial expressions of emotion. In Cole, J. K. (Ed.) Nebraska Symposium on Motivation 1971. University of Nebraska Press. Pp. 207-283.

Fernandez-Dols, J. M., & Ruiz-Belda, M. A. 1995 Are smiles a sign of happiness? Gold medal winners at the Olimpic Games. Journal of Personality and Social Psychology, Vol.69, No. 6, 1113-1119.

Fridlund, A. J. 1991 Sociality of solitary smiling: Potentiation by an implicit audience. Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 60, No. 2, 229-240.

Kraut, R. E. & Johnston, R. E. 1979 Social and emotional messages of smiling: An ethological approach. Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 37, No. 9, 1539-1553.

瀧上凱令 2004 スマイルは喜びの表出か－ワールドカップサッカー（2002年）のゴールシーンから－　日本心理学会第68回大会発表論文集　p. 215.